

こまどりと酒

小川未明

青空文庫

よる 夜おそくまで、おじいさんは仕事しごとをしていました。寒いさむい、冬のふゆことで、外そとには、雪ゆきがちらちらと降ふっていました。風かぜにあおられて、そのたびに、さらさらと音おとをたてて、窓まどの障し子こに当たあるのあがきこえました。

いえうち 家の内うちに、ランプの火ひは、うす暗ぐらくともつていました。そして、おじいさんが、槌つちでわらを叩たたく音おとが、さびしいあたりに、おりおりひびいたのであります。

このおじいさんは、たいそう酒さけが好きすでしたが、貧ますしくて、毎まい晩ばんのように、それを飲のむことができまませんでした。それで、夜業よなべに、こうしてわらじを造つくって、これを町まちに売うりにゆき、帰かえりに酒さけを買かつてくるのをたのしみにしていたのであります。

のほら 野原のほらも、村むらも、山やまも、もう雪ゆきで真まっ白しろでありました。おじいさんは、毎まい晩ばん根気こんきよく仕事しごとをつづけていたのであります。

こう、雪ゆきが降ふつては、隣となりの人も話ひとはなしにやつてくるには難儀なんぎでした。おじいさんは、しんとした外そとのけはいに耳みみを傾かたむけながら、「また、だいぶ雪ゆきが積つもつたとみえる。」と、独ひとりごとをしました。そして、また、仕事しごとをしていたのであります。

このとき、なにか、窓まどの障しょうじ子こにきて突つきあたったものがあります。雪ゆきのかかる音おとにし

ては、あまり大きかつたので、おじいさんは、なんだろうと思ひました。

しかし、こうした大雪のときは、よく小鳥が迷つて、あかりを見てやってくることもあるものだと、おじいさんは知つていました。これはきつとすずめか、やまがらが、迷つて飛んできたのだろう。こう思つて、おじいさんは、障子を開けてみますと、暗い外からはたして、一羽の小鳥がへやのうちに飛び込んできました。

小鳥は、ランプのまわりをまわつて、おじいさんが仕事をしていたわらの上に降りて、すくんでしまいました。

「まあ、かわいそうに、この寒さでは、いくら鳥でも困るだろう。」と、おじいさんは小鳥に近づいて、よくその鳥を見ますと、それは美しい、このあたりではめつたに見られな
いこまどりでありました。

「おお、これはいいこまどりだ。おまえは、どこから逃げてきたのだ。」と、おじいさんは、いいました。

こまどりは、野にいるよりは、たいてい人家に飼われているように思われたからです。おじいさんは、ちょうどかこの空いているのがありましたので、それを出してきて、口を開いて、小鳥のそばにやると、かごになれているとみえてこまどりは、すぐにかごの中へ

はいりました。

おじいさんは、小鳥ことりが好きで、以前いぜんには、いろいろな鳥とりを飼かった経験けいけんがありますので、雪ゆきの下したから青菜あおなを取とってきたり、川かわ魚いかなの焼やいたのをすつたりして、こまどりに餌えを造つくってやりました。

こまどりは、すぐにおじいさんに馴なれてしまいました。おじいさんは、自分じぶんのさびしさを慰なぐさめてくれる、いい小鳥ことりが家うちにはいつてきたものと喜よろこんでいました。

明あくる日ひから、おじいさんは、こまどりに餌えを造つくってやったり、水みずをやったりすることことが楽たのしみになりました。そして太陽たいようが、たまたま雲間くもまから出でて、暖あたたかな顔かおつきで、晴はれば晴ばれしくこの真まつ白しろい世よの中なかをながめますときは、おじいさんは、こまどりのはいつているかごをひなたに出だしてやりました。こまどりは不思議ふしぎそうに、雪ゆきのかかった外そとの景色けしきを、頭あたまを傾かたむけてながめていました。そして日ひが暮くれて、またあたりが物もの寂さびしく、暗くらくなったときは、おじいさんは、こまどりのはいつているかごを家いえの中なかに入れて、自分じぶんの仕事場しごとばのそばの柱はしらにかけておきました。

二、三日にちすると、こまどりは、いい声こえで鳴なきはじめたのであります。それは、ほんとうに、響ひびきの高たかい、いい声こえでありました。

おそらく、だれでも、この声を聞いたものは、思わず、足をとどめずにはいられなかつたでしょう。おじいさんも、かつて、こんないいこまどりの声を聞いたことがありませんでした。

ある日のこと、酒屋の小僧が、おじいさんの家の前を通りかかりますと、こまどりの鳴く声を聞いてびつくりしました。それは、主人が大事に、大事にしていた、あのこまどりの声そっくりであったからです。主人のこまどりは、雪の降る朝、子供がかこの戸を開けて逃がしたのでした。

「こんなに、いい声のこまどりは、めつたにない。」

と、主人は平常自慢をしていました。その鳥がいなくなつてから主人は、どんなに落胆をしたことでありましょう。

「どこへ、あの鳥は、いったらう。」と、主人は朝晩いつているのでした。

小僧は、思いがけなくこのこまどりの鳴き声を、道を通りすがりに聞きましたので、さつそく、おじいさんの家へやつてきました。

「お宅のこまどりは、前からお飼いになつているのでございますか？」と、小僧は、たずねました。仕事をしていたおじいさんは、頭を振つて、

「いや、このこまどりは雪の降る、寒い晩に、どこからか、窓のあたりを見ても飛んできたのだ。きつとどこかに飼つてあつたものが逃げてきたと思われるが、小僧さんになにか心あたりがありますか。」と、おじいさんはいいました。

小僧は、これを聞いて、

「そんなら、私の家のこまどりです……。」と、彼は、雪の降る日に、子供が逃がしたと、主人がたいそう悲しがつて、毎日いい暮らしていることなどを話しました。

おじいさんは、柱にかかつているこまどりのかごをはずしてきました。

「このこまどりに見覚えがあるか。」と、小僧に、たずねました。

小僧は、自分が、朝晩、餌をやつたり、水を換えてやつたこともあるので、よくその鳥を覚えていましたから、はたして、そのこまどりにちがいないか、どうかとしらべてみました。すると、その毛色といい、ようすといい、まったく同じ鳥でありましたので、

「おじいさん、この鳥に相違ありません。」といいました。

「そんなら、早く、この鳥を持って帰つて、主人を喜ばしてあげたがいい。」と、おじいさんはいいました。

小僧は、正直なやさしいおじいさんに感心しました。お礼をいって、こまどりを

もらつて、家から出かけますと、外の柱に酒徳利がかかつていました。それは、空の徳利でありました。

「おお、おじいさんは、酒が好きとみえる。どれ、主人に話をして、お礼に、酒を持ってきてあげましょう。」と思つて、小僧は、その空の徳利をも、いつしよに家へ持つて帰りました。

主人は、いつさいの話を小僧から聞いて、どんなに喜んだかしれません。「おじいさんにこれから、毎日徳利にお酒を入れて持つてゆくように。」と、小僧にいつけました。

小僧は、徳利の中へ酒を入れて、おじいさんのところへ持つてまいりました。

「おじいさん、柱にかかつていた徳利に、お酒を入れてきました。どうか、めしあがつてください。」といいました。

おじいさんは、喜びましたが、そんなことをしてもらつては困るからといいました。

「私は、町へわらじを持つていつて帰りに酒を買おうと思つて、徳利を、柱にかけておいたのだ。」と、おじいさんはいいました。

小僧は、主人のいいつけだからといつて、酒のはいっている徳利をまた柱にかけて、

「おじいさん、酒さけがなくなったら、やはり、この柱はしらに、空からの徳利とくりをかけておいてください。
 」といいました。

おじいさんは、酒さけが好きすでしたから、せつかく持もつてきたものをおも
 徳利とくりを取とつてすぐに飲のみはじめたのであります。

酒さけを飲のむと、おじいさんは、ほんとうに、いい気持きもちになりました。いくら、家いえの外そとで、
 寒さむい風かぜが吹ふいても、雪ゆきが降ふつても、おじいさんは火ひのかたわらで酒さけを飲のんでいると、暖あたた
 であつたのです。

酒さけさえあれば、おじいさんは、寒さむい夜よを夜業よなべまでしてわらじを造つくることもしなくてよか
 つたので、それから夜よるも早はやくから床とこにはいつて眠ねむることにしました。おじいさんは眠ねむりな
 がら、吹雪ふぶきが窓まどにきてさらさらと当あたる音おとを聞いていたのであります。

明あくる朝あさ、おじいさんは、目めをさましてから、戸口とぐちに出でて、柱はしらを見みますと、昨きのう日から空との徳
 利とくりを懸かけておいたのに、いつのまにか、その徳利とくりの中なかには、酒さけがいつぱい、はいつていま
 した。

「こんなにもしてもらつては、気きの毒どくだ。」と、おじいさんは、はじめのうちはおも
 が、いつしか毎まい日にち、酒さけのくるのを待まつようになつて、仕事しごとは、早はやく片かたつけて、後あとは、火ひ

のかたわらでちびりちびりと酒を飲むことを楽しみとしたのであります。

ある日のこと、おじいさんは柱のところについてみますと、空の徳利が懸かっています。

「これは、きつと小僧さんが忘れたのだろう。」と思ひました。

しかし、その翌日も、その翌日も、そこには、空の徳利がかかっています。

「ああきつと、永い間酒をくれたのだが、もうくれなくなつたのだろう。」と、おじいさんは思ひました。

おじいさんは、また、自分から働いて、酒を買わねばならなくなりました。そこで、夜はおそくまで、夜業をすることになりました。

「なんでも、他人の力をあてにしてはならぬ。自分で働いて自分で飲むのがいちばんうまい。」と、おじいさんは、知つたのであります。

しばらくたつと、酒屋の小僧がやってきました。

「じつは、せんだつてまたこまどりが、どこかへ逃げてしまつたのです。もう、ここへはやつてきませんか？」といひました。

おじいさんはそれで、はじめてもう酒を持ってきてくれないことがわかつたような気が

しました。

「どうして、大事なこまどりを二度も逃がしたのですか。」と、おじいさんは怪しみました。

「こんどは、主人が、ぼんやりかごの戸を開けたままわき見をしているうちに、外へ逃げてしまったのです。」と、小僧は答えました。

「それが、もし、おまえさんが逃がしたのならたいへんだった。」と、おじいさんは、笑って、

「どんな人間にも、あやまちというものがあるものだ。」といいました。

おじいさんは、毎晩、夜おそくまで仕事をしたのであります。またおりおり、ひどい吹雪もしたのでした。

おじいさんはうす暗いランプの下で、わらをたたいていました。吹雪がさらさらと、窓に当たる音が聞こえます。

「ああ、こんやのような晩であったな。こまどりが吹雪の中を、あかりを目あてに、飛び込んできたのは。」と、おじいさんは独り言をしていました。

ちようど、そのとき、おりもおり窓の障子にきてぶつかつたものがあります。バサ、

バサ、バサ……おじいさんは、その刹那、すぐに、小鳥だ……こまどりだ……と思いましたが。そして、急いで障子を開けてみますと、窓の中へ、小鳥が飛びこんできて、ランプのまわりをまわり、いつかのように、わらの上に降りて止まりました。

「こまどりだ！」と、おじいさんは思わず叫んだのです。

おじいさんは、このまえにしたように、また、かごの空いたのを持ってきて、その中にこまどりを移しました。それから、雪を掘って、青菜を取り、また川魚の焼いたのをすつたりして、こまどりのために餌を造ってやりました。

おじいさんは、そのこまどりはいつかのこまどりであることを知りました。

そして、それを、酒屋の小僧に渡してやったら、主人がどんなに喜ぶだろうかということを知りました。

そればかりではありません。おじいさんは、このこまどりを酒屋へやったら、先方は、また大いに喜んで、いままでのように、毎日、自分の好きな酒を持ってきてくれるに違いないということを知りました。

おじいさんは、どうしたら、いいものだろうと考えました。

こまどりは、おじいさんのところへきたのを、うれしがるように見えました。そして、

その明るく日からいい声を出して、鳴いたのであります。

おじいさんは、このこまどりの鳴き声を聞きつけたら、いまにも酒屋の小僧が飛んでくるだろうと思いました。

寒い、さびしかった、永い冬も、もうやがて逝こうとしていたのであります。たとえ吹雪はしても、空の色に、はや、春らしい雲が、晩方などに見られることがありました。

「もう、じきに春になるのだ。」と、おじいさんは思いました。

山から、いろいろの小鳥が、里に出てくるようになりました。日の光は、一日ましに強くなつて、空に高く輝いてきました。おじいさんは、こまどりのかごをひなたに出してやると、さも広々とした大空の色をなつかしむように、こまどりはくびを傾けて、止まり木にとまつて、じつとしていました。

「ああ、もう春だ。これからは、そうたいした吹雪もないだろう。昔は広い大空を飛んでいたものを、一生こんな狭いかごの中に入れておくのはかわいそうだ。おまえは、かごから外へ出たいか？」と、おじいさんは、こまどりに向かっていっていました。

こまどりは、しきりに、外の世界に憧れていました。そして、すずめやほかの小鳥が、木の枝にきて止まっているのを見て、うらやましがっているようなようすに見えました。

おじいさんは、酒屋へいつてかこの中にすむのと、また、広い野原に帰つて、風や、雨の中を自由に飛んですむのと、どちらが幸福であろうかと、小鳥について考えずにはいられませんでした。

また、酒の好きなおじいさんは、この小鳥を酒屋に持つていつてやれば、これから毎日自分は、夜業をせずに、酒が飲まれるのだということをも思わずにはいられませんでした。しかし、おじいさんはついに、こまどりに向かつて、

「さあ、早くにげてゆけ……そして、人間に捕まらないように、山の方へ遠くゆけよ。」
といつて、かこの戸を開けてやりました。

もう、気候も暖かくなつたのでこまどりは、勇んで、夕暮れ方の空を、日の落ちる方に向かつて飛んでゆきました。その後また、吹雪の夜はありましたけれど、こまどりは、それぎり帰つてはきませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦ 講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

※表題は底本では、「こまどりと酒《さけ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こまどりと酒

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>